

[最優秀賞]

富樫 由美子さんレビュー (秋田市)

書評対象図書

くどう れいん 著『わたしを空腹にしないほうがいい』(BOOKNERD)

食べることは、生きること

お腹をすかせて読んではいけない。いや、お腹をすかせて読んでほしい。(どっちだ!)

短歌の歌集を含め多数の著書を持ち、小説『氷柱の声』が芥川賞候補にもなった盛岡市在住作家の、デビュー作ともいえる一冊だ。

食に関する小さな文章、日付がついているから日記ともよべる小さなエッセイの各タイトルがすべて俳句になっている。その俳句がまたいい。タイトルだけ読んで句集として楽しんでもいい。いやだめだ。ぜひとも文章を味わってほしい。(どっちだ!)

たとえば6月24日「あぢさゐや忘却は巨大なひかり」では、認知症により作者の名前さえも曖昧になってしまった祖母が、ラディッシュの酢漬けの作り方をしっかり覚えていた、というエピソードがせつなくもユーモアをまじえて綴られている。「忘却の巨大なひかりに呑みこまれたとき、それでもわたしが語りつづけることはいったい何だろう」という結びの一文からは、老いること、忘れることに対するあたたかでしたたかな受容を感じる。

このあたたかさ、したたかさは、食べることへの食欲さから来ているのだと思う。生命力、ということもできる。食べることを楽しむことは、生きることを楽しむことだ。食べることを愛しむことは、自分を、人間を愛しむことだ。

登場する食べ物はどれも身近で、どうしようもなくおいしそうだ。料理の過程も含めて匂いや触覚まで伝わってきそうな筆致に、何度も引き込まれてしまう。

2016年6月に俳句のウェブマガジン「スピカ」に連載されたものに加筆修正し、改訂版として再編集したものだという。2016年6月まるひと月ぶんの日記と、2017年6月の日記数日ぶん、それに「おかわり対談」として毛蟹さん、橋本玲奈さんと作者が食事をしながら交わすトークがそれぞれ収録されている。

文庫サイズの厚くはない冊子だが、じゅうぶんお腹いっぱいになる。イラストもすてきだ。

ぜひ多くの人に読んでほしい。いや、すでに出会った幸運な私たちだけの宝物にしておきたい。(どっちだ!)